

太宰治『義理』論

——反響する〈卑怯〉——

* 館 下 徹 志

Tetsushi TATESHITA

A study of Dazai Osamu's "Giri"

Reflective "Cowardice"

はじめに

昭和十九年五月、太宰治は『武家義理物語（新釈諸国噺）』という短編小説を「文藝」（十二巻五号）に発表した。翌年、『新釈諸国噺』（昭和20・1、生活社）収載時に『義理』と改題される作品である。「義理のために死を致す事、これ弓馬の家のならひ」と書き出されるこの小説は、井原西鶴の浮世草子『武家義理物語』（貞享五・一六八八・二月刊）巻一の第五話「死なば同じ浪枕とや」の筋立てを土台としている。

原話は、ある武士による苦渋の決断を山場とする悲話であった。「摂州伊丹の城主荒木村重」に「横目役」として仕える「神崎式部」は、「筋目たゞしきゆゑ」を以て「年久しく此御家を治め」ていた。あるとき、「主君の御次男村丸」が「東国蝦夷が千島の風景御一覽」を思い立ち、式部とその「一子の勝太郎」を含む「御供」たちと「東路にくだ」ることとなる。その道中、「折ふしの雨ふりつゞく」「卯月のすゑ」に事件は起きた。大井川の「水嵩次第につの」る様を見した式部が渡河の日延べを上申したものの、「若殿」は「血気さかんにましまして、是非をかんがへ給はず、御心のままに越せよ」と命じ、そのため「大浪に分入り、流れて死骸の見えぬものあまたにて」という大惨事となったのである。式部は「同役の森岡丹後」から「諸事頼むとの一言」とともにその一子「丹三郎」を預かっていたが、「人馬ともに吟味し」た甲斐もなく、「岸根今すこし」というところで「川越瀬を踏違へて」、丹三郎はあえなく流れに吞まれてしまった。「十方にくれて暫く思案しすまし」た後、式部は無事に渡河を果たした勝太郎を呼び寄せ、「汝世に残しては丹後手前、武士の一分立ちがたし、時刻うつさず相果てよといさめ」る。「さすが侍の心根すこしもたるむ所なく、引きかへして立つ浪に飛び入」った勝太郎を見送り、式部は「時

節外なる憂き別れ」に「世を觀じ」つつも、「主命の道をそむくの大事」と村丸の蝦夷一覽随伴の務めを全うした。その後、病を理由に辞職を願い出た式部は、妻と一緒に「播州の清水」で仏門に入る。大井川一件の事情を漏れ聞いた丹後もまた、「俄に御暇乞ひ請け」、妻子ともども「式部入道の跡をしたひ」出家して、互いに「たぐひなき後世の友」となったという。

式部の心内語として語られる「まことに人間の義理程悲しき物はなし」という嘆きは、「義理に身を果せる」（『武家義理物語』序）ことの切なさを真率に映し出す。では、「人情を殺してでも守らねばならない義理」（日野龍夫）とはいかなるものか。この一編は〈義理〉について論じる際、その具体例としてしばしば引用されてきた。例えば、源了圓はここに「信頼にたいする呼応の意味の義理」と「恥をいさぎよしとせず名を重んずる義理」とが「表裏一体をなす」構造を見る。また、風間誠史は本作の〈義理〉の本質を、「世間」からの眼差しを意識した「互酬の連鎖」にあるとする。

太宰治は「死なば同じ浪枕とや」のどのようなところに心を動かされたのだろうか。『義理』が『新釈諸国噺』の中にあつて太宰の改変部分が多い部類に属していることは明白である。典拠からの引用が目立つ冒頭と末尾のほかは、登場人物の言動に関して大幅な加筆が施されている。とりわけ、「森岡丹三郎」についての記述は詳細を極め、明確な性格付けがなされており、これまでその点が『義理』を取り上げる際の論点の一つとなることが多かった。本稿では、〈義理〉が成立する過程について、先行研究を参看しながら、登場人物の形象の問題や同時代の背景を考え合わせ論じてみたい。

まず、「死なば同じ浪枕とや」からそのまま引き継いだ設定に目を向けたい。

この小説には、実在が確かめられる歴史的人物として、「伊丹の城主、荒木村重」が登場する。「最も戦国乱世を象徴する人物」とされる武将であるが、従来、『義理』を論じるにあたって、その存在は等閑視されてきたといつてよい。たしかに、荒木村重は「御次男、村丸」の「途方もない」願い出を、「よろしい、蝦夷一覽もよからう、行つておいで、若い頃の長旅は一生の薬」と「事もなげに」許す、甘い父親の一面を覗かせただけであった。村丸帰城後の反応も何一つ書かれてはいない。だが、戦国武将・荒木村重にまつわる逸話の数々は、『義理』の読み解きに欠かせない基調をなしているのではないか。史実はともかくとして、村重伝説のいくつかは、『義理』が発表された戦時下にあつて広く知られていたはずであり、それらの主題は『義理』においても共有されていたものと考えられる。ここでは、村重をめぐる三つの代表的な逸話とそこから導き出される人物像をまとめておくことにする。

時系列の順で並べるとき、その第一に位置するのは、村重が織田信長に初めて対面した際の伝説である。元龜四（一五七三）年三月、信長は足利義昭との抗争の直中にあつた。

村重素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の変に、首として信長に応じ、迎へて大津に謁す。面貌甚だ偉なり。会々饅頭を献ずる者あり。信長、佩刀を抜いて、饅頭を鋒に貫き、以て村重に啗はしむ。村重進んで、口を開いてこれを受く。信長笑つて曰く、「好男子、摂津十三郡は汝がこれを剪取するに任す」と。

頼山陽の『日本外史』（天保七・一八三六年刊）が簡潔に伝えるのは、武技と度胸とを兼ね備えた闘将・荒木村重の姿である。頼りになる家臣を得た喜びから、信長はこみあげる笑いを抑えられなかったのだろう。摂津一国の本領を安堵することで、村重への信任を表明したことになる。「佩刀」に刺した「饅頭」と村重の大口という取り合わせが印象的なこの場面は、江戸後期に至って恰好の画題となった。こうして、村重について語られる伝説の第一は、その〈剛胆〉に焦点が当てられていた。

第二は、天正六（一五七八）年、信長への謀叛の意を明らかにし、有岡（伊丹）城に籠もつていたときの美談である。それは、『常山紀談』（元文四・一七三九年、湯浅常山自序）にも記され、『日本外史』を経て『幼学綱要』（明治十四・一八八一年六月、元田永孚自序）に採られて、〈修身〉の教材となった友愛の物語であつた。

○羽柴秀吉、荒木村重ト友トシ善シ。織田信長讒ヲ信ジテ、村重ヲ殺サムトス。村重怖レテ遂ニ叛ク。秀吉其讒ニ由ルヲ以テ、信長ニ請ヒ、往テ村重ニ説キ、其叛ヲ止ム。辞意懇到ナリ。村重納ルルコト能ハズ。其臣河原林越後、秀吉ヲ殺シテ、以テ信長ノ力ヲ殺ガムト請フ。村重曰ク、汝ガ言吾ガ利ヲ計ルナリ。然レドモ秀吉ノ我ニ於ル、断金ノ交ヲ結ブコト久シ。今我家ノ将サニ亡ビムトスルヲ憫ミ、又我ガ害心無キコトヲ知ル。是ヲ以テ来リ諫ムルナリ。夫レ窮鳥懷ニ入ル、之ヲ殺スニ忍ビズ。而ルヲ況ヤ朋友ノ信義ヲ以テ来ル者ヲヤ。若シ之ヲ撃タバ、是レ禽獸ニ劣ルナリ。遂ニ秀吉ニ酒ヲ飲マシメ、色ヲ和ゲテ款語スルコト之ニ久シ。秀吉ノ去ルニ及テ、手ヲ携テ之ヲ庁外ニ送り、相与ニ別ヲ惜メリ。

史学研究においても、村重による謀叛の理由は未だに判然とせず、後述する第三の逸話とも連動する〈謎〉とされる。ともあれ、太田牛一の『信長公記』（慶長十五・一六一〇年頃成立）に記された信長からの翻意の促しを拒み、籠城を続ける村重のもとに「断金ノ交ヲ結ブコト久シ」い羽柴秀吉が訪ねてくる。そこで「河原林越後」は、信長にとって重臣のひとりである秀吉を無き者にする好機だ、と村重に進言した。戦国の世では当然の「吾ガ利ヲ計ル」一手である。しかし、村重は動かない。秀吉は村重に「害心無キコトヲ知ル」ゆえ、「窮鳥」、すなわち逃げ場を失った鳥も同然の立場に陥ることを怖れなかった。その「朋友ノ信義」には報いなければならぬからである。和やかな惜別の宴のあと、村重は秀吉を懇ろに見送つたという。『幼学綱要』の章立てでは「信義」を讃える逸話として採録されている。

第三は、有岡城から尼崎城への脱出の模様を語る言い伝えである。天正七（一五七九）年九月二日、夜陰に乗じて「五・六人召列伊丹を忍出、尼崎へ移り候」（『信長公記』）という行動に出た「荒木摂津守」が、その後有岡に帰城するこ

とはなかったらしい。同年十一月に有岡城は開城し、その翌月、城内に取り残されていた者たちは、信長の命によって処刑されることになる。『織田軍記』（遠山信春撰・貞享二・一六八五年自跋）は村重の罪深さについて力説する。

剩さへ大臣家の御取立を以て、村重終に伊丹、有岡、尼崎等、数城の主と成り、過分の所領を賜つて、拔群の御恩を蒙るといへども、欲心に厭足らず、近年又謀叛を起し、御敵となり、今又妻子親類を顧みず、士卒眷属を捨て殺して、悪も己が一命を脱る、武門の盜賊、罪責恥辱之に過ぎず、不義無道の至極にして、人非人の挙動と云ふべきなり、

村重が選択した尼崎城への脱出には、戦局の好転をもたらす何らかの目算があつたのかもしれない。有岡城が落ちた後も、尼崎城での抗戦は続いた。ただ、そうした史実を置き去りにして、伝説としての人物像は形作られ流布していく。「命の惜さに数多の兵士を爰に捨置、只一人此城をのがれ出たり、かゝる卑怯の大將」（『繪本太閤記』二編、寛政十・一七九八年刊）、「荒木一人の云為にて、一門・親類上下の数を知らず、してうの別れ血の涙をながす」（『信長公記』）という事態の捉え方は、近代以降も崩れることはなかった。情愛も義理も踏みじり、我が命惜しさに逃亡した武士・荒木村重の〈卑怯〉は、長く人々に記憶されることとなるのである。

それでは、これまで見てきた〈剛胆〉・〈信義〉・〈卑怯〉という互いに相容れない村重像は果たして、『義理』にどのような効果をもたらすのだろうか。

二

周囲の者たちの心中を代弁するかのように、語り手は「若殿」村丸による「蝦夷一覽」の企てを「途方もない事」、「我儘の願ひ」と断定的に批評する。「まことに手のあまる腕白者にて、神崎はじめ重臣一同の苦勞の種」だった「若殿」に付き従い、「摂州伊丹」・「蝦夷」間を往復する「長旅」の苦難は、誰もが予想できたに違いない。ところが、先述のとおり、「かねて村丸最眞の城主荒木」はこの無体な希望を「事もなげに」聞き容れてしまう。「若い頃の長旅は一生の業」とは実に、「御供」の迷惑を顧みない暢気な物言いである。ところで、そもそも村丸はなぜ「蝦夷一覽」を思い立ったのか。そこには、源義経の英雄

遍歴譚『御曹子島渡』の後を追う趣向が念頭にあつたのではなからうか。

室町時代後期以降、写本や刊本として広く読まれた〈御伽草子〉中の一編『御曹子島渡』には、義経が「大日の兵法」を「千嶋とも、ゑぞが島とも」呼ばれる「北州」の国で手に入れるまでの遍歴が描かれている。異類の者たちが住む島々を巡行した後、義経はようやく目的地にたどり着く。「ゑぞが島」の都を治める「かねひら大王」の娘・「天女」と「二世の契」を結んだ義経は、彼女による命がけの手引きで「大日の兵法」を書き写すことに成功する。「義経をあはれみ、源氏の御代になさんため、鬼の娘に生れさせ給ひ」、兵法を伝えさせた「天女」は、「日本相模国、江の島の弁財天の化身」だった。この草子には、見なれぬ世界を空想することの愉しき、超人的な能力への憧れ、異性と交わされるまめやかな情感の揺れ、危機を乗り切ることの痛快さなど、物語の典型的な魅力の数々が散りばめられている。

「死なば同じ浪枕とや」と同じく「蝦夷」を目指した『義理』の「若殿」は、このような先行文芸が形成する文化的な文脈に依存していたといえよう。「蝦夷とはどのやうな国か、その風景をひとめ見たい」と言い出し、「蝦夷を見ぬうちはめしを食はぬ」と駄々をこねた村丸にとって「蝦夷」は、義経がかつて戦の秘伝「大日の兵法」を獲得した異境だった。そこは武士としての特異な能力を得られるかもしれない、〈貴種流離〉にふさわしい島国であつた。村丸は、戦国期の武将たちから、伝説的な兵法家として崇められていた義経と自己とをだぶらせ、武士の本流に我が身を置く幻想に浸っていたのである。無論、『義経記』や『浄瑠璃御前物語』に描かれた、義経にはつきものの〈悲恋〉説話もまた、まだ見ぬ土地への憧憬を募らせる要因となつただろう。

こうして〈義経伝説〉をなぞる村丸は、『平家物語』の「宇治川先陣」（巻第九）をも再演しようとする。その共演を持ち掛けられたのは丹三郎だった。

どうだ、蛸め、われら二人抜け駆けてこの濁流に駒を進め、かの宇治川先陣、佐々木と梶原の如く、相競つて共に向う岸に渡つて見せたら、臆病の式部をはじめ供の者たちも仕方なく後からついて来るだらう。

大井川の「濁流」は屈託なく「かの宇治川」に見立てられ、「臆病の式部」に勇猛果敢な振る舞いを誇示するための舞台は整った。遊戯性すら湛えた冒険

の誘いには何のためらいもない。誰の目にも明白に危難が迫る状況だからこそ、冒険の遂行には価値が生じる。さらには、渡河を果たせば、主君を守ることが務めである「供の者たち」も懸命に追従するはずだ、という予測も正しい。とはいえ、この命懸けの渡河にどのような意味があるのかは誰にもわからない。強行突破に価値を見出し、勇に誇ろうとする村丸の思いだけが、この場を統べる絶対的な「法」なのである。

村丸はひたすら、父譲りの「剛胆」を試したかったのだろう。一代にして摂津一国の支配者にまで上り詰めた偉大な父・荒木村重の子として、その正統性を証明するために「御曹子島渡」や「宇治川先陣」の後を追った。ところが、その意に反してここに露呈しているのは、武芸上の技量や胆力とは別の、「暗愚」という問題なのだ。想像上の勇猛な武士を演じたい村丸にとって、従者は引き立て役に過ぎない。あるいは、臣下の命を軽んじること、主君に与えられた特権の一部と見なしていよう。『義理』は、「家中粒選りの武士三十人」が国元を離れて、旅中の閉じられた権力関係に置かれる、擬似的な密室劇という側面を持つ。その閉鎖的な権力構造の頂点に、未熟極まりない観念的な武士・村丸が君臨している。それは一見、後に村重が選択することになる「卑怯」な所行を反転させた「剛胆」な意志決定と映るが、実はともに、「義理」からも「情」からも乖離するという主従関係崩壊のきっかけとなっている。「暗愚」とは、そのような人間関係への感受性を欠いたありようを指す。つまり、村丸は父の背中越しに見えた「もののふ」たちの武勇を真似るだけの、想念上の武士にほかならなかったのである。

三

森岡丹三郎の人物形象をめぐって異口同音に指摘されるのは、「戯画化」という手法である。原話では「同役の森岡丹後一子に丹三郎十六歳成るが始めての旅立」と書かれるのみで、容貌や性格には全く触れていない。「始めての旅立」というところにわずかな不安が示唆される程度であった。それに対して、『義理』の語り手は、丹三郎の人となりや細々と饒舌に伝える。

式部の同役森岡丹後の三人の男の子の末子丹三郎とて十六歳、勝太郎に較べて何から何まで見劣りして色は白いが眼尻は垂れ下り、唇厚く真赤で猪八戒

に似てゐるくせになかなかのおしやれで、額の面砲を気にして毎朝ひそかに軽石でこすり、それがために額は紫色に異様にてかてか光つてゐる。でつぷりと太つて大きく、一挙手一投足のろくさく、武芸はきらひ、色情はさかん、いぎたなく横坐りに坐つて、何を思ひ出してゐるのか時々、にやりと笑つたりして、いやらしいいたら無い子であつた。けれどもこの子は、どういふものか若殿村丸のお氣にいりて、蛸よ蛸よと呼ばれて、いつもお傍ちかく侍つて若殿にけしからぬ事を御指南申したりして、若殿と共にげらげら下品に笑ひ合つてゐるのである。

旅中、丹三郎の言動は、荒木村重が伊丹（有岡）城主だった戦国期の天正年間ではなく、当時から見れば後世となる江戸時代の風物や美意識にこだわりの見せる。例えば、時代考証からいえばありえない風物として、村丸と「夜おそくまで」興じていた「狐拳」を挙げる事ができる。「庄屋拳」・「藤八拳」など多くの異名を持つ「狐拳」が、「初めて文献に現れるのは十八世紀の後半であろう」と推定されている。狐・庄屋（名主）・鉄砲（狩人）が「三すくみ」をなす「狐拳」は、「独特の間と調子（掛け声）を伴い、しかも「着座ではあるが身体を大きく使う」ところに特徴を持つ。とりわけ十九世紀に入ってから「歌舞伎、浮世絵、拳酒にみられる酒宴文化などを通じて大衆的な人気を博した」。「宿の女中にたはむれて賭事やら狐拳やら双六やら、いやらしく忍び笑ひして打興じて」いたという村丸と丹三郎は、江戸後期以降流行する酒興付きの「遊山の旅」を楽しんでいたことになる。

一方の近世的美意識とは、何かにつけ「野暮」を連発して嫌悪の情を漏らすことに表象される「粧」への心酔である。「お前たちは野暮だからな。固いばかりが忠義ぢやない。狐拳くらゐ覚えて置けよ」と吐き捨てる丹三郎の真意は、「毎夜、若殿の遊び相手をやらされて、へとへと」になっていることへの無理解という「世態に通じない、人情を解しない」野暮をなじることで、自らをその対極に位置づけることであつた。それは、江戸中期の「洒落本」が遊里を作品世界として諧謔的に追求するであろう「通」の先取りを意味するものと考えられる。「なかなかのおしやれで」、己の容姿にこだわり、「武芸はきらひ、色情はさかん、いぎたなく横坐りに坐つて、何を思ひ出してゐるのか時々、にやりと笑つたりして、いやらしいいたら無い」という丹三郎の描写には、語り手

が興に乗って〈半可通〉を揶揄する（洒落本）の手法が認められよう。²⁰ また、「若殿にけしからぬ事を御指南申したり」という曖昧な表現の陰には、色道を含めた、〈武〉に程遠い遊興とのつながりがほの見える。こうして、丹三郎は江戸中期以降の世態風俗の中を生きる〈文弱〉の武士として戯画化されていることがわかる。

典拠にはない丹三郎の「反武士的性格」²¹（南陽子）は、必然的に他の登場人物の形象や語りにも影響を与える。「神崎勝太郎とて十五歳、式部の秘蔵のひとり息子で容貌華麗、立居振舞ひ神妙の天晴れ父の名を恥かしめぬ秀才の若武者」と、非の打ち所がない描かれ方がなされるのは、「何から何まで見劣りする丹三郎との差を強調するためである。語り手はこの二人の噛み合わせ話を楽しむように実況解説し、両者の気質の違いを浮かび上がらせる。救いのない結末を迎えるこの小説の緊張を緩める読みどころの一つといえよう。場面は鈴鹿峠、馬上の丹三郎は「どうにもお尻が痛くてたまらなくな」り、「勝太郎にも徒歩をすすめて馬を捨てさせ」たものの、今度は「徒歩も野暮だと言ひはじめた」。丹三郎にとつて、気に入らぬことはもれなく「野暮」なのである。

「かうして、てくてく歩いてゐるのも気のきかない話ぢやないか。」蛸は駕籠に乗つて峠を越したかつたのである。

「やつぱり、馬のはうがいいでせうか。」勝太郎には、どつちだつてかまはない。

「なに、馬？」馬は閉口だ。とんでもない。「馬も悪くはないが、しかし、まあ一長一短といふところだらうな。」あいまいに誤魔化した。

「本当に、」と勝太郎は素直に首肯いて、「人間も鳥のやうに空を飛ぶ事が出来たらいいと思ふ事がありますね。」

「馬鹿な事を言つてゐる。」丹三郎はせせら笑ひ、「空を飛ぶ必要はないが、駕籠に乗りたいたいのだ。けれどもそれをあからさまに言ふ事は流石に少しはばかられた。「空を飛ぶ必要はないが、」とまた繰返して言ひ、「眠りながら歩く、といふ事は出来ないものかね。」と遠廻しに謎をかけた。

「それは、むづかしいでせうね。」勝太郎には、丹三郎の底意がわからぬ。無邪気に答へる。「馬の上なら、眠りながら歩くといふ事も出来ませうけれど。」

「うん、あれは、」あれは、あぶない。蛸には、馬上で眠るなんて芸当は出

来ない。眠つたら最後、落馬だ。「あれは、また、野暮なものだ。眼が覚めて、ここはどこか、と聞いても、馬は答へてくれないからね。」駕籠だと、駕籠かきが、へえ、もうそろそろ桑名です、と答へてくれる。ああ、駕籠に乗りたいたい。

「うまい事をおつしやる。」勝太郎には、蛸の謎が通じない。ただ無心に笑つてゐる。

語り手は丹三郎の「底意」をめぐる、〈見せぬ／見えぬ〉というもどかしいやりとりに分け入る。忖度を求める側は「底意」を口にした時点で失うものがあることを熟知している。丹三郎は武士としての意気地、または荒木村重の重臣・森岡丹後の子であるという矜持を失いたくなかった。「乗馬は不得手」な〈文弱〉の武士という実質と武家としての誇りとは別の事象なのである。語り手は丹三郎の「底意」をからかいても籠めて示しながら、勝太郎の察しの悪さにも気が揉めるようだ。「謎」を解くどころか、「謎」を「謎」と認知しない勝太郎の「無邪気」や「無心」は、鴛田亨が指摘するように、「丹三郎の救いようのない卑小さを物語るものとして機能している」²²ことは確かであるが、執拗な「謎」の投げかけに不自然さを覚えぬ勝太郎に、語り手は呆れてもいる。〈真心〉から発せられる言葉に比べ、隠さねばならない「底意」とは大抵醜いものだ。しかし、「あいまい」で「遠廻し」な表現の意味するところを幅広く捉える側に立つ語り手は、「秀才の若武者」にさえある瑕瑾を見逃さない。不快感を「野暮」としか言い表せない丹三郎にも、他者の発言に潜む感情や欲望を推し量れない勝太郎にも、村丸の〈暗愚〉と同じく未熟さを見るのである。

語り手は、後日談を含めてこの小説内の出来事を、それらが完結した後には再現しようとしている。夜更かしと朝寝坊を繰り返す丹三郎は、ある朝、勝太郎から起床を促され、「お前たちは、おれを馬鹿にしてゐるんだ」とあらぬ方向に憤懣をぶつけ始める。長々と愚痴をこぼした丹三郎は二度寝を決め込んだ。

襖越しに神崎式部はこれ聞いてゐた。よつほどこのまま捨て置いて発足しようかと思つた。本当に、うつちやつて行つたはうがよかつたのだ。さうすれば、のちのさまさまの不幸が起らずにすんだのかも知れない。けれども、式部は義理を重んずる武士であつた。諸事よろしくたのむ、とぴたりと畳に

両手をついて頼んだ丹後の声が、姿が、忘れられぬ。式部はその日も黙つて、丹三郎の起床を待った。

傍線部の批評的な語りは、式部が耐え忍んで守ろうとした「義理」も、悲劇の遠因となったことを言い当てている。「義理を内面化できぬ式部」(木村小夜)が果たそうとする「空洞化した〈義理〉」(安田義明)という優れた読みの根拠はここにある。それは、このあと起こる破滅的な出来事の原因を一元化させないための周到な誘導といえるだろう。ここでいう一元化とは、〈善悪〉に代表される性質の分断全般のことである。鈴鹿峠の場面に見られた語り手の過度の介入は、丹三郎の「不仕鱈」をおもしろがるばかりではなく、勝太郎のとばけた反応にも光を当て、〈賢愚〉の対立という一元化を回避する効果があった。『義理』の語りはこのあと、死なば浪枕とや」の語り手が堅持する〈義理〉や信仰への全幅の信頼を相対化する。

四

一行が「名高い難所の大井川」にたどり着いたのは「卯月のすゑ」のことだった。丹三郎の「夜ふかしと朝寝」のため、旅程が「十日近くもおくれて」、渡河に難儀する厄介な時期と重なってしまったのである。その「設定の巧みさ」に注目する小泉浩一郎は、「悲劇の第一前提」を「構成」しただけではなく、「若殿村丸の豪雨を衝いての大井川渡河」に「決定的な影響を与えた」丹三郎の「完璧な迄に首尾一貫し」た「役割」を析出する。はたして、この小説の最高潮をなす大井川の悲劇は、丹三郎一人が招来した災いと考えてよいのだろうか。

式部による「けふはこの金谷の宿に一夜」という「用心深い処置が気にいらなかった」村丸は、「これしきの川が渡れぬなんて、式部も耄碌したやうだ」と丹三郎こと「蛸」に同意を求める。「身近な者との間で優劣の比較に晒されてきたという共通性」から村丸と「精神的紐帯」で結ばれている丹三郎はこれに応え、「国元の猪名川」との比較で大井川を「こんな小さい川」とけなした後、「水癩癩」なる「親から子へと遺伝する」病を持ち出す。「どのやうに弓馬の武芸に達してゐても、この水を見るとおそろしくぶるぶる震へるといふ奇病」だという。村丸の「お気にいり」であることをよいことにして、式部父子を愚弄し溜飲を下げようという魂胆なのである。村丸がここで先述した「宇治川先

陣」の再現を持ち掛け、今まさに「駒に打ち乗り、濁流めがけて飛び込まうとする」のを、式部は必死に諫める。

「おやめなさい、おやめなさい。式部かねて承るに大井川の川底の形状転常なく、その瀬その淵の深淺は、川越しの人夫さへ踏違へることしばしば有りとの事、いはんや他国のわれら、抜山の勇ありといへども、血気だけでは、この川を渡ることむづかしく、式部はけふ一日、その水癩癩とやら奇病にでも何にでも相成りますから、どうか式部の奇病をあはれに思召して、川を越える事はあすになさつて下さい。」と涙を流して懇願した。

まことの臆病者の丹三郎は、口ではあんな偉さうな事を言つたものの、蛸め、つづけ！ と若殿に言はれた時には、くらくらと眩暈がして、こりやもうどうしようと、うろろろしたが、式部が若殿をいさめてくれたので、ほつとして、真青な顔に奇妙な笑ひを浮べ、「ちえ、残念。」と言つた。

それがいけなかつた。その出鱈目の言葉が若殿の気持をいつそう猛り立たせた。

「蛸め。式部は卑怯だ。かまはぬ、つづけ！」と式部の手のゆるんだすきを見て駒に一鞭あて、暴虎馮河、ざんぶと濁流に身ををどらせた。

「若殿」の無事を最優先に考える式部は、恥辱を受けようとも足止めの責任を一身に負う覚悟でいる。丹三郎が一旦は「ほつとし」たのは、式部の諫言に情理を尽くした言葉の迫力があつたからだろう。ところが、「まことの臆病者」は余計な「出鱈目の言葉」を吐き捨ててしまう。村丸の心の内を読み同調することにあまりにも習熟していたがために漏れ出た強がりである。真に「卑怯」なのは、渡河の延期を上申する式部ではなく、虚勢の裏に「まことの臆病者」を隠していた丹三郎の方だということを、村丸は知らない。

ここで注意したのは、傍線部の表現が含み持つ意味の奥行きである。〈卑怯〉は、城中に多くの者を残したまま有岡城から脱出した村重について語るときに典型的な評語であつた。その村重の「御次男」が「卑怯」という言葉で家臣をなじるといふ皮肉を見落としてはならないだろう。典拠では「血気さかんにましまして、是非をかんがへ給はず、御心のままに越せよとの仰せ」と、若

さゆえの意地に溺れた村丸だったが、『義理』においては、「血氣」に加えて「毫碌」した「卑怯」者の式部を対照項として、その対極にある〈剛胆〉を演じようとしているのである。これもまた、村重の逸話を想起させるとともに、村丸が先人たちに倣おうとした理想とも合致する。

これらの重層的な言葉の働きの加えて同時代の状況から浮かび上がるのは、〈渡河〉という行為にまつわる特異な喚起力なのではないか。近代以降の戦記や軍談には戦略としての〈敵前渡河〉が頻繁に取り上げられる。〈クリーク〉のような運河も含めて〈河〉は作戦上、危険を承知でどうしても渡らねばならない最前線となることもあった。記録する価値が高い戦闘行為と見なされたのはそのためである。例えば、戦地での体験に基づく実録小説である日比野士朗「呉淞クリーク」（『中央公論』昭和十四年二月）は、弾雨の中、渡渉作戦にあたる部隊を一人の兵士の視点で描き評判となった。日比谷與志雄が『無敵陸軍魂』（昭和十七年八月、大新社）で「敵前上陸と渡河作戦」を「皇軍精神の真骨頂」と讃えたように、この決死の作戦は、『戦陣訓』（昭和十六年一月）にいう「攻撃精神」の象徴だった。「凡そ戦闘は勇猛果敢、常に攻撃精神を以て一貫すべし」という〈訓え〉は、当時の子ども向けの文章や絵本にも盛り込まれ、しばしば〈敵前渡河〉が絵入りで取り上げられた。²⁷

戦時下において〈卑怯〉とは〈攻撃精神〉の喪失を意味していた。村丸がことさらに式部の「卑怯」を問題にすることによって、『義理』が発表された時代の〈精神〉、「勇猛果敢」に背く臆病さは差異化される。近世的世界に浮かれ遊ぶ丹三郎と同様に、村丸も時空を超えて昭和の〈攻撃精神〉と共鳴し、〈渡河〉に特別な価値を見出しているかのようだ。村丸にとって大井川は、「宇治川先陣」を競い合った勇敢な武者たちに同化して、後に我が家名を汚すことになる「卑怯」という敵と相対する戦場だったのである。とすれば、「用心深い処置が気にいらなかった」時点で、「暴虎馮河」はもはや避けがたかったといわねばならない。

さて、岸に残ったのは式部・勝太郎・丹三郎の三人である。この期に及んでも、丹三郎の世迷い言は収まらない。だが、「若殿は野暮だ。思ひやりも何も無い。おれは実は馬は何よりも苦手なのだ。何もかも目茶苦茶だ」と被害者面をされても、「跡見役の式部親子」には当然返す言葉はない。「初めて若殿の庇護から放り出され」た丹三郎の悲嘆に寄り添っている場合ではないのである。

「これも皆、あなたの言葉から起った難儀です」と諭した式部は、「国元を出る時」の森岡丹後の言葉を胸に「けふまで我慢に我慢を重ねてあなたの世話をきて来」たことを明かしてから、「心配せず、大浪をかぶつてもあわてず」に「何でもただ馬の首にしがみついて」いるよう指示する。

おだやかに言はれて流石の馬鹿も人間らしい心にかへつたか、
「すみません。」と言つて、わつと手放して泣き出した。

諸事頼むとの一言、この事なりと我が子勝太郎を先に立て、次に丹三郎を特に吟味して選び置きし馬に乗せて渡らせ、わが身はすぐ後にひたと寄添つてすすみ渦巻く激流を乗り切つて、難儀の末にやうやく岸ちかくなり少し安堵せし折も折、丹三郎いささかの横浪をかぶつて馬の鞍覆へり、あなやの小さい声を残してはるか流れて浮き沈み、騒ぐ間もなくはや行方しれずになつてしまつた。

「諸事頼むとの一言」以下の箇所は、「死なば同じ浪枕とや」の表現を巧みに引用しながら、引き締まつた即時描写がなされている。ただし、文語助動詞「し」を用いた「選び置きし」、「安堵せし」は典拠にはなく、「選んで置いた」、「安堵した」との語感の差異を意識した言葉遣いが見られる。また、畳みかけるように連用形で終わる節をつなぎ、文語調の速度感を出している。直前まで「流石の馬鹿も」とくだけた調子で丹三郎をからかっていた語り手の見事な豹変ぶりである。

川越しの人足が「瀬を踏み違へ」たことを丹三郎の水難の原因とする原話とは異なり、『義理』では、式部の指示どおり「馬の首にしがみついて」いることすらできなかった丹三郎のもろさが前景化される。語り手はここにも、丹三郎の〈剛胆〉からの疎外を刻みつけるのである。

五

相良亨は「死なば同じ浪枕とや」に「約諾を重んじる精神」を見る。「頼む」という一言に対して頼まれたと約諾した以上、武士たるものは全人格的に、いかえれば生命をかけてもこれを守るべきであるという武士のモラル²⁸が発動せざるを得ない。したがって、「頼まれた」ことを実行できなかった場合の身

の処し方は自ずと決まっている。その暗黙の契約を〈義理〉と呼ぶのだろう。『義理』における「諸事よろしく頼みますぞ」という森岡丹後の言葉は式部にとって、主命の次に重みを持つ「約諾」の起点だった。その信頼に応えられなかった式部には、一子勝太郎の死のほかに〈義理〉を果たす道はない。自ら死を選ぶことは、主命である「若殿」の「蝦夷一覽」の「御供」という任務を放棄することになるからである。

「流れに飛び込んで死んでおくれ。丹三郎はわしの苦勞の甲斐も無く、横浪をかぶつて鞍がくつがへり流れに吞まれて死にました。そもそもあの丹三郎儀は、かの親の丹後どのより預り来れる義理のある子です。丹三郎ひとりか溺れ死んで、お前が助かったとあれば、丹後どのの手前、この式部の武士の一分が立ちがたい。ここを聞きわけておくれ。時刻をうつつさずいますぐ川に飛び込み死んでおくれ。」と面を剛くして言ひ切れば、勝太郎さすがは武士の子、あ、と答へて少しもためらふところなく、立つ川浪に身を躍らせて相果てた。

「この式部の武士の一分」を保つことは、一人の武士としての体面に拘泥することではなく、「約諾を重んじる」神崎家という「筋目正しき」武家の名譽を守ることにほかならない。それはまさしく、荒木村重が〈名を惜しむ〉ことを捨て、〈命を惜しむ〉ことに走ったとされることと表裏をなすものだろう。〈卑怯〉はこの小説の至るところで呼び覚まされる〈負〉のしるしなのである。

こうして家門を背負い引導を渡したことになる式部の言葉が冗長に見えるほど、勝太郎の最期は、あまりにあっけないものだった。その並外れた「聞きわけ」のよさを〈潔さ〉として評価することが、『武家義理物語』と『新釈諸国断』とに共通する鑑賞の枠組みとなっている。ただし、そうした〈美質〉を賞揚することが〈名を惜しむ〉ことの先にある自己犠牲の黙認あるいは讚美につながることを忘れてはなるまい。先に見たように、勝太郎は人情の機微に疎い未熟さも抱えていた。「少しもためらふところなく」という語りは、覚悟の陰に潜むそうした未熟さというノイズも響かせているのではなからうか。

「義理のために死を致す事、これ弓馬の家のならひ」と前置きして始まったこの小説は、勝太郎の義理の死を描くことで最終章を迎える。一子を失った式

部は「まことに武家の義理ほどかなしき物はなし」と嘆き、「城主にお暇を乞ひ、老妻と共に出家して播州の清水の山深くかくれた」。丹後もやはり「その経緯を聞き伝へて志に感じ」、「妻子とも四人」、「皆出家して勝太郎の菩提をとむらつた」のだった。両家の相次ぐ出家を受け、「いつの世も武家の義理ほど、あはれにして美しきは無し」という語りを添えて『義理』は閉じられる。

丹後が感じた「志」とは、「諸事よろしく頼みますぞ」という自らの言葉から始まった式部の苦悩の全てである。「死なば同じ浪枕とや」で「人も多きに我を頼むとの一言、そのまゝには捨てがたく」と式部に述べさせた〈信義〉こそ、丹後と式部とをつなぐ紐帯だった。それは、「同役」という仕事上の信頼関係を超えた〈友愛〉と言ひ換えてもよい。有岡城を舞台にした村重と秀吉との再会と別れの逸話をここに重ね描くことができよう。〈信義〉に厚い村重の一面を引き継ぐかのように、「横目役」を務めてきた二人の重臣は互いを尊重し合うのである。原話の最後に置かれる「ふしぎの縁にひかれて菩提に入りし山の端の月、心の曇らぬ語らひ、たぐひなき後世の友、行ひすまして、年月を送りしに」という、信仰の功德を修辭的に語る後日談が省かれたのは、太宰の感興の中心が、救いに到達する〈発心譚〉にはなく、〈信義〉に基づく「武家の義理」の「あはれにして美しき」在り方にあつたからだろう。

おわりに

『大日本戦史』（全八巻、昭和十七、十九年、三教書院）の編者で、歴史学者の高柳光寿が「朝日新聞」夕刊に「武の精神に徹せよ」という文章を寄せたのは、昭和十九年二月八日、〈大詔奉戴日〉のことであつた。

負け惜しみや、泣言を並べてゐるときではない。理窟も何も抜きでただ戦はねばならぬ、敵は国土の一部を侵した、この苛烈な現実に眼を据ゑて、銃後は憤りに蹶起しなければならぬ、世界にタッタ一つの日本の武士道は現実に即してただ勝ち抜くために手段を尽した、〈中略〉銃後国民たるもの残るか滅びるかのみ、どんな高い税金でも引受けねばならぬ、くり返していふがこの現実をハッキリ把握して勝つための戦力をしぼり出すのが武の精神だ、量の少いのは質で補ふといふやり方は通用せぬ、量には量でゆき敵を圧倒せねばならぬ、〈中略〉要は現実に即して戦力を最高度に發揮することだ、鎌

倉以来鍛錬に鍛錬を重ねてきた武の精神に徹してけふの決戦を戦ひとらう³⁰

〈大東亜戦争〉の序盤に占領した太平洋上の島々からの撤退、守備隊の全滅が相次いで伝えられていたこの頃、本土への空襲はもはや時間の問題だった。高柳が強調するのは、生き延びるための「手段」は、戦に明け暮れた武士たちがそうしたように、「現実」に即して「案出されなければならぬ」という一点である。具体的には、政府からの〈増産〉や〈貯蓄〉の要請をふまえて、「量には量」で対抗する気構えと実行を呼びかけている。ここでいう「武の精神」とは、事実の直視や分析によって効果的な戦略を練り上げ、実践する〈現実主義〉のことであり、それゆえに「量の少いのは質で補」えばよいとする〈精神主義〉はきっぱりと斥けられることになる。さらに、史料が語る歴史的事実に対する高柳の忠実さという〈現実主義〉は、学問的良心にしたがって、「鎌倉以来」と「武の精神」の起源を設定したところにも表れている。当時、「日本の武士道」といふものは建國以来、或は神代から起つてゐる³¹ というような非合理的な言説が幅を利かせていた。〈武士道精神〉は〈日本精神〉の神髄として語られた。

〈不敗神話〉の補強を狙った歴史の改竄である。山内祥史の推定によれば、「昭和19年3月末頃までに脱稿³²」したと考えられる『義理』は、このような戦況が劣勢に大きく傾く現実の中で構想され、夥しい「現代の・武家」の死³³（渡邊正彦）が報じられる時代に向けて発表されたのだった。太宰は「義理のために死を致す」勝太郎に、同時代の戦死者たちを重ね合わせていたのだろう。「いつの世も武家の義理ほど、あはれにして美しきは無し」という感慨に追悼の念を読むこともできる。

そうした真情の仮託の可能性を認めつつも確かめておきたいのは、作品世界に漂う村重の影である。村丸・丹三郎の「遊山の旅」が江戸期の道中記を思わせる漫遊そのものだったように、『義理』は特定の時代を背景とする歴史小説を志向してはいない。多くは近世以降に創作された、多分に矛盾を内包する村重の伝説は、『義理』の構造を如実に照らし出していた。〈卑怯〉と〈信義〉という武家における「義理」の両端を生きたとされる荒木村重の特質は、太宰の『義理』で前者は森岡丹三郎に、後者は神崎式部にそれぞれ分け与えられた。特に〈卑怯〉は西鶴が「死なば同じ浪枕とや」に描かなかつた性質であり、そこに太宰による翻案の着想はあつたのだろう。「御次男」村丸に分与された〈剛

胆〉はその〈卑怯〉を反転させたものだが、そこには、式部の諫言を「卑怯だ」と見誤り、〈強行渡河〉を試みた結果、二人の若武者を失うという〈暗愚〉も同居していた。これらの〈卑怯〉を核として避けがたく変転する事態は、一元化への懐疑をもたらし、「戦陣訓」が強調する「勇猛果敢」や「攻撃精神」という〈精神主義〉の正体をも照らし出すのである。

注

1 太宰治『義理』の本文は『太宰治全集』7（平成10・10 筑摩書房）による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のままとし、漢字は新字に統一した。文中の傍線は引用者による。

2 『武家義理物語』の本文は、日本古典全集『西鶴全集』第八（正宗敦夫編纂校訂昭和3・1 日本古典全集刊行会）による。

3 日野龍夫「西鶴の義理」（『樞人間讃歌』4 昭和49・5、『日野龍夫著作集』第三卷 近世文学史 平成17・11 ぺりかん社）

4 源了圓『義理と人情 日本的性情の一考察』（昭和44・6 中公新書）

5 風間誠史「西鶴を読むということ——「世間」論の視座からの「死なば同じ浪枕とや」（『相模国文』31 平成16・3、『近世小説を批評する』平成30・1 森話社）

6 安藤宏「翻案とパロディのあいだ」（太宰治『お伽草紙・新釈諸国噺』平成16・9 岩波文庫）。また、『新釈諸国噺』の研究史に関する「太宰治は「正しく」西鶴を読んだという信頼が前提となっている」という中丸宣明の指摘（『義理』とその出典——先行研究をめぐって——「太宰治研究」22 平成

26・6）は重要である。

7 天野忠幸「荒木村重」（シリーズ・実像に迫る¹⁰ 平成29・6 戎光祥出版）

8 『日本外史』の本文は、『日本外史』中（頼成一・頼惟勤訳 昭和52・5 岩波文庫）による。

9 『幼学綱要』の本文は、日本近代思想大系6『教育の体系』（山住正己校注 平成2・1 岩波書店）による。

10 『信長公記』の本文は、『信長公記』（奥野高広・岩沢愿彦校注 昭和44・11 角川文庫）による。

11 『織田軍記』の本文は、『物語日本史大系』第七卷（昭和3・7 早稲田大

学出版部)による。

12 『繪本太閤記』の本文は、『物語日本史大系』第八卷『太閤記』上(昭和

3・8 早稲田大学出版部)による。

13 徳富猪一郎『近世日本国民史 織田氏時代中編』(大正8・6 民友社)には、妻子兄弟を捨てて城を脱出した荒木村重の行動について「如何にも日本武士として、卑怯千万ぢや」と述べられている。

14 『御曹子島渡』の本文は、日本古典文学大系38『御伽草子』(市古貞次校注 昭和33・7 岩波書店)による。

15 田中伸『西鶴の説話の諸相——「新釈諸國噺」の素材をめぐって——』(『国文学 解釈と鑑賞』32・2 昭和42・2)、千葉正昭『「新釋諸國噺」私註——「戯画化」と「誠実さ」——』(『研究集録』27 宮城県高校教育研究会国語部会 昭和61・3)などで「戯画化」の手法とその効果が論じられている。

16 セツ・リンハルト『拳の文化史』(平成10・12、角川書店)

17 杉谷修一「ジャンケン遊びにおける三すくみとシンボル」(『西南女学院大
学紀要』16 平成24・3)

18 注17に同じ。

19 九鬼周造『「いき」の構造』(昭和5・11 岩波書店)

20 田舎老人多田爺『遊子方言』(明和7・一七七〇年刊)には、〈通〉を気取るもの的外れな行動を繰り返す「通り者」が描かれる。

21 南陽子「太宰から西鶴を読む——「義理」をめぐる悲喜劇——」(『近世文芸研究と評論』63 平成14・11)

22 鴫田亨「太宰治「義理」論——西鶴から太宰へ——」(『宮城教育大学国語
国文』27 平成12・11)

23 木村小夜「太宰治「義理」論——戦略としての翻案——」(『叙説』26 平成
10・12 『太宰治翻案作品論』第二章『新釋諸國噺』論 第六節「義理」に
加筆収載 平成13・2 和泉書院)

24 安田義明「太宰治『新釈諸國噺』論——〈わたくしのさいかく〉への変容
を視点に——」(『國學院短期大学紀要』25 平成30・7)

25 小泉浩一郎『「新釈諸國噺」論——「大力」「裸川」「義理」をめぐり——』
(『日本文学』25・1 昭和51・1)

26 注23に同じ。

27 西條八十作、脇田和画「兵隊さんの河渡り」(『コドモノクニ』16・14 昭

和12・11)や高木義賢『一番乗り武勇伝』(支那事変少年軍談3 昭和13・9
講談社)などに〈敵前渡河〉の模様が描かれている。

28 注23に同じ。

29 相良亨『武士道』(平成22・9 講談社学術文庫)

30 「朝日新聞」夕刊(昭和19・2・8)二面

31 井上哲次郎「道義の国日本・武士道は神代から」(『解説戦陣訓』昭和16・
3 東京日日新聞社・大阪毎日新聞社)

32 山内祥史『太宰治の年譜』(平成24・12 大修館書店)

33 渡邊正彦「太宰治「義理」論——「義理の死」と「戦死」——」(『太宰治
研究』11 平成15・6)。傍点は本文による。